

来館目的と利用行動からみた複合公立図書館の利用実態に関する研究

福本 七海

1. 研究の背景と目的

近年、公立図書館を取り巻く環境は大きく変化しており、高度経済成長期以降の複合図書館の増加と、その運営形態の変化はますます顕著になっている¹⁾。

図書館の複合化は、設計・運営上の課題が挙げられる一方で、利用者増加の相乗効果や利便性の向上、用地の取得難と利用者要求の多様化への対応等から²⁾、近年では新築図書館の半数以上が複合図書館となっている。今日では、図書館を核とした地域の中心的な賑わいの場とするため、積極的に他施設との複合化が行われる事例も見られるようになり、施設利用者の来館目的や使い方も多様化していると考えられる。中でも、複合公立図書館では図書館と他施設の相互利用（以下、ついで利用）が行われ、従来の図書館ではみられない利用形態が考えられる。利用行為は施設の諸室やそのつながりから影響を受けることから³⁾、今後の複合公立図書館の計画にあたっては、ついで利用も考慮した計画や家具配置が必要となる。

そこで本研究では、2003年以降に新設または改修された複合公立図書館を対象に、施設利用者の来館目的をもとに利用行為をとらえることで、今後の公立図書館の計画に資する知見を得ることを目的とする。

2. 研究の方法

2-1. 調査対象

本研究では、建築雑誌に掲載されている図書館のうち、2003年以降駅から2km圏内に新設または改修された全国の複合公立図書館を対象とする。該当する図書館の図面情報は建築雑誌や施設台帳から収集する。

2-2. 調査方法

本研究では施設台帳や建築雑誌から収集した各種図面などによる資料調査、図書館管理者への運営方針・利用状況に関するアンケート調査を行い、複合公立図書館の管理状況について把握する。加えて複合機能による利用者増加への相乗効果の期待、駅前などの利便性の高い敷地への立地など積極的な理由から複合化され特徴的な計画が行われた施設について、来館者に対するアンケート調査、施設利用者を対象とした巡回観察調査を行うことでその利用実態を明らかにする。

表1. 調査概要

調査内容	調査時期(年.月)	対象館数	概要
資料調査	2018.4-9	48 館	2003 年以降に新設・改修された全国の複合公立図書館の技術提案書や施設台帳、実施図面を収集し、平面計画の特徴を把握する。
アンケート調査①	2018.9-10	43 館	対象館の管理者に施設の運営方針・利用状況についてアンケートを行い、運営状況を把握する。
アンケート調査②	2018.10-11	2 館	中でも積極的な理由から複合化され、特徴的な計画が行われた 2 館の来館者を対象に施設の利用状況についてアンケートを行い、その特徴を把握する。
巡回観察調査	2018.10-11	2 館	予め計画したルートを 30 分間隔で巡回し、各エリアでの利用の分布と行動を平面図にプロットする。

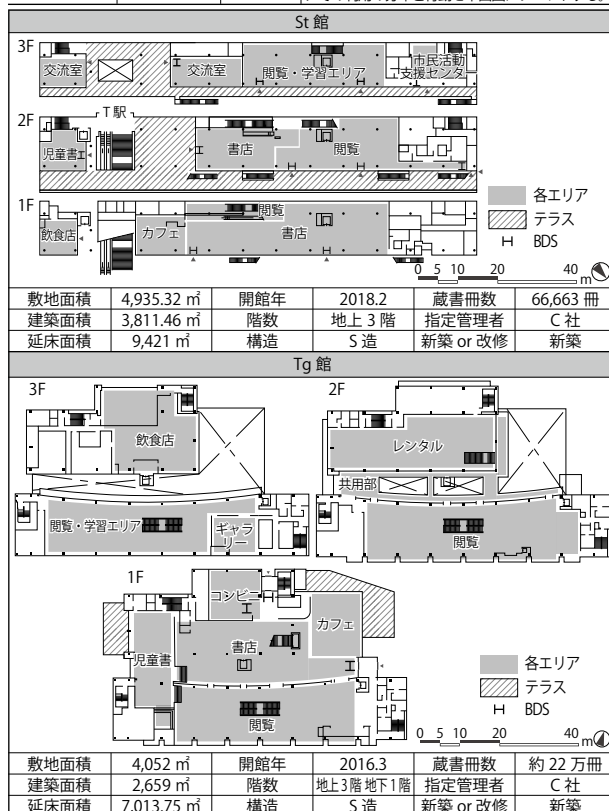


図1. 調査対象館の概要

表2. 実態調査概要

実態調査	St 館		Tg 館	
	2018.10.28(日) 晴	2018.10.29(月) 晴	2018.11.11(日) 晴	2018.11.12(月) 晴
調査日程				
座席数	406 席		434 席	
調査時間 (開館時間)	10:00-21:00 (09:30-22:00)		09:30-20:00 (09:00-21:30)	
アンケート回答者数	115 人	117 人	111 人	111 人
巡回回数	18 回		17 回	
プロット数	2,493 人	1,845 人	3,332 人	2,630 人
備考	2階行スでマルシェイベントの開催		1階加にてライブイベントの開催	

3. 複合施設の機能構成とその割合

近年の複合公立図書館には地域の賑わいの拠点となるよう、複数の施設と複合している館も存在する。対象館の複合施設をその機能によって分類すると、その割合は社会教育施設と商業・産業施設の2種類が全体の約7割を占める。特に、社会教育施設ではホールや生涯学習センターなどを含む文化学習施設が約6割、商業・産業施設では飲食店が約6割と高い割合を占め

ている。このことから近年では、飲食店のような気軽に利用しやすい機能やホールなどの大きな空間を必要とする公共施設と複合する傾向にあることがうかがえる。また、1つの複合施設に同じ大分類に含まれる機能が複数複合されている館もあるため、その複合数を施設の大分類別にみると、殆どの大分類で約半数または半数以上の館が1種類の機能を複合しているが、商業・産業施設と社会教育施設は1館に複合されている機能数が多く、2種類以上複合している館の割合も高い。また、調査対象館48館の複合した機能の平均数は約4種類であり、4館が10種類以上の他機能施設と複合している（表3、図2）。

4. 複合公立図書館における運営方針の傾向

複合公立図書館の運営方針の傾向をとらえるため、管理者アンケートをもとに、調査対象館の運営方針を貸出指向型・課題解決指向型・滞在指向型の3項目に分類すると、全体の運営方針の傾向では、課題解決指向型の項目のうち2項目を6割以上の図書館が重視しており、その一方で滞在指向型の項目の3項目を約6～7割の図書館が重視している。次にそれぞれの管理方式別にみると、直営管理方式を採用している図書館は全体とほぼ同じ傾向にあり、特に約9割の図書館が地域の発展を支える情報拠点であることを重視している。2006年に文部科学省が発表した「これからの図書館像」の中で、図書館設置者は「図書館は地域を支える情報拠点であることと認識」することと明記されたことが、多くの図書館でこの項目が重視されている要因の一つと考えられる。一方、指定管理者が管理する図書館では、課題解決指向型の項目は全体とほぼ同じ傾向にあるが、滞在指向型の全ての項目が全体よりも高くなっており、滞在指向型の運営方針を重視していることがうかがえる。

また、項目ごとにその傾向をみると、「自動貸出機の導入」は直営の図書館の約3割、指定管理の図書館の約6割が重視している。この指定管理者が管理する図書館8館のうち6館が「レファレンス機能の充実」「生涯学習サービスの提供」の両方を重視していることから、貸出業務の自動化により職員の労力を低減し、課題解決につながる充実したサービスの提供を試みていることがうかがえる。一方、施設全体の出入口にBDSを設置している図書館12館のうち8館が「複合した他施設と連携したサービスの提供」を重視しており、さらに他機能をもつ施設同士をつなぐ吹抜けや複数の機能が一体化した空間構成等の特徴が共通してみられる。「独自の分類法の採用」を選択した11館のうち3館は、

表3. 複合施設の機能分類

大分類	中分類	施設機能の具体例
商業・産業施設	小売・物販店舗	店舗
	飲食店	レストラン、カフェ
	商業・産業施設	産業支援センター、商工会議所
	賃貸事務所	オフィス
社会教育施設	文化・学習施設	ホール、劇場、プラネタリウム、公民館、生涯学習センター、コミュニティセンター
	収蔵・展示施設	ギャラリー、美術館、展示、資料館
	庁舎施設	市役所、区役所
行政施設	行政施設	市民サービスセンター、市民活動支援センター
	児童・幼児施設	児童館、託児所、保育所
児童福祉施設	子育て支援施設	子育て支援センター
	青少年支援施設	青少年支援センター
	保健施設	保健センター
医療・保健施設	医療施設	診療所
	社会福祉施設	障がい者福祉センター
学校教育施設	各種学校	小学校、サテライトキャンパス、大学関連施設
居住施設		住宅
交通施設		駅、バスセンター

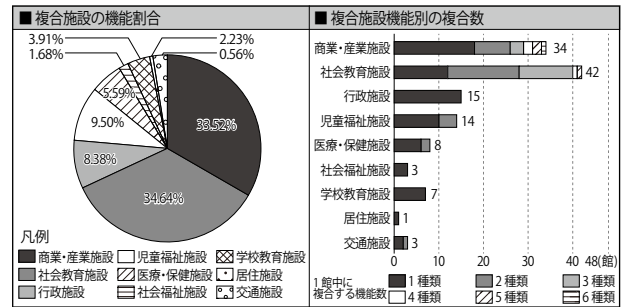


図2. 複合施設の機能割合とその複合数

表4. 図書館運営方針の定義

運営方針	定義	アンケート項目
貸出指向型	市民の求める図書の提供を重視し、貸出活動を中心とする図書館サービスと指向するもの	・貸出冊数の向上 ・自動貸出機の導入 ・読書通帳の導入
課題解決指向型	地域社会の様々な資料や情報を有効活用できるような供し、地域の課題解決やそのための人々の取組への展開を支援する図書館を指向するもの	・レファレンス機能の充実 ・他図書館との連携、協力 ・生涯学習サービスの提供 ・地域の発展を支える情報拠点であること ・雑誌記事、新聞記事の提供 ・検索機器の充実
滞在指向型	誰もが気軽に訪れ、館内で様々なサービスを楽しみながら長時間快適に過ごすことのできる図書館を指向するもの	・利用者が居心地のいい空間づくり ・閲覧席の充実 ・広い開架書架、閲覧室 ・利用者が居心地のいい家具の選定 ・複合した他施設と連携したサービスの提供 ・独自の分類法の採用 ・市民の交流の場となること

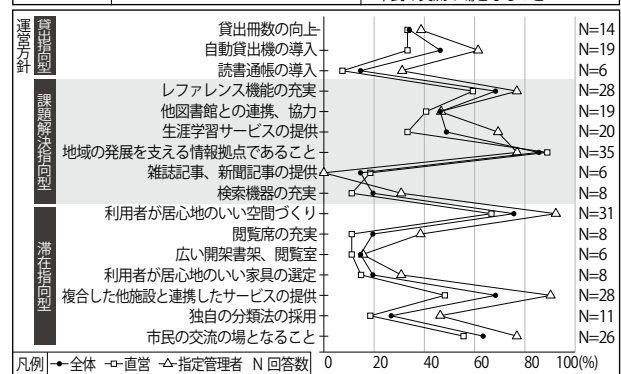


図3. 管理方式と運営方針の傾向

公立図書館で一般的に用いられる日本十進分類法と生活や趣味に関する資料をテーマ別に配架する独自の分類法の両方を採用しており、2種類の分類はそれぞれの階に配架されている（表4、図3）。

5. 利用実態の分析

5-1. 主要空間別にみた座席利用者の行動

St館では両日とも閲覧エリアで読書、学習室で勉強、書店やカフェで休憩を行う人が多くみられた。特に学習室は、平日の18時以降と休日の14～16時にほぼ全ての座席が利用されており、同時間帯に他のエリア

で勉強を行う利用者はあまりみられない。特に、閲覧エリアには閲覧専用席との注意書きがあり、他の図書館で多く見られる学習室からのあふれだし利用を抑えられていると考えられる。休日の2階に着目すると、常に休憩を行う利用者がみられる。これは、駅と直結する2階部分にベンチ席が多く配置されており、その場所で会話やスマートフォンを使用するといった行為がとりやすい環境となっているためであると思われる。

Tg館では両日とも閲覧エリアで読書と休憩、学習室とカウンター席のある共用部で勉強、カフェで休憩を行う利用者が多くみられた。学習室が満席に近い平日16時以降と休日10時～16時半までは、椅子の多いカフェや2階閲覧エリアで勉強を行うあふれ出し利用、休日の18時以降にカフェの勉強利用がみられるのは、調査当日が近隣の中学校の試験期間中であったことによるものである。また、平日の1階閲覧エリアや休日の1、2階閲覧エリアにて休憩を行う人が多いのは、同エリアにソファ席が多く配置され、利用者がくつろげる空間が提供されているからと考えられる。

5-2. 施設利用者の来館目的

まずSt館の来館目的の有無についてみると、両日ともに割合はほぼ同じである。来館目的がない利用者が半数近く見られる理由には、当施設が駅に直結しており、外出や帰宅のついでに気軽に立ち寄ることができるためと考えられる。また来館目的をもつ利用者の内訳をみると、平日は閲覧が4割以上であるのに対し、休日は限定・休憩が約3割である。これは休日に2階テラスで行われたイベントへの参加目的や、カフェ利用目的で来館する利用者が多かったためと考えられる。

次に、Tg館では両日とも7割以上が来館目的をもつ利用者である。その内訳をみると、平日は解決・限定・その他の目的が約3割、休日は解決・限定が約4割と割合が高い。これは、平日はレンタルショップを目的とした利用者が多かったこと、休日はカフェエリアで行われたイベントの参加者による影響と考えられる。

5-3. 立ち寄り利用者の利用空間のつながり

来館者アンケートをもとに、来館目的がない利用者(以下、立ち寄り利用者)の利用空間の分析を行った。

まずSt館の立ち寄り利用者の利用空間数に着目すると、両日とも約6割が複数空間を利用しており、特に休日は3つ以上の空間の利用者の割合が高い。また各空間の単一空間利用者をみると、1階書店と2階閲覧エリアで平日は約2.5割、休日は約3割を占める。この要因としては、1階書店と2階閲覧エリアにそれぞれ外部から直接出入りできることが考えられる(図6)。

表5. 着座行為の分類

着座行為	定義
読書	図書・雑誌・新聞などを読んだり、映像・音楽資料などを視聴している行動
勉強	筆記用具を用いた活動。持ち込みの参考書などの資料を読んでいる場合も含む
作業	PC・タブレット機器等を用いた活動
休憩	読書・勉強・作業を行っておらず、携帯電話を操作したり、おしゃべり、食事などを行っている行動
読み聞かせ	幼児・児童などに対し保護者・職員などが音読して聞かせる活動
不在	座席に荷物などがあり、誰も着座していない状態。利用者が周囲の座席に荷物を置き、他の利用者が利用できない場合も含む

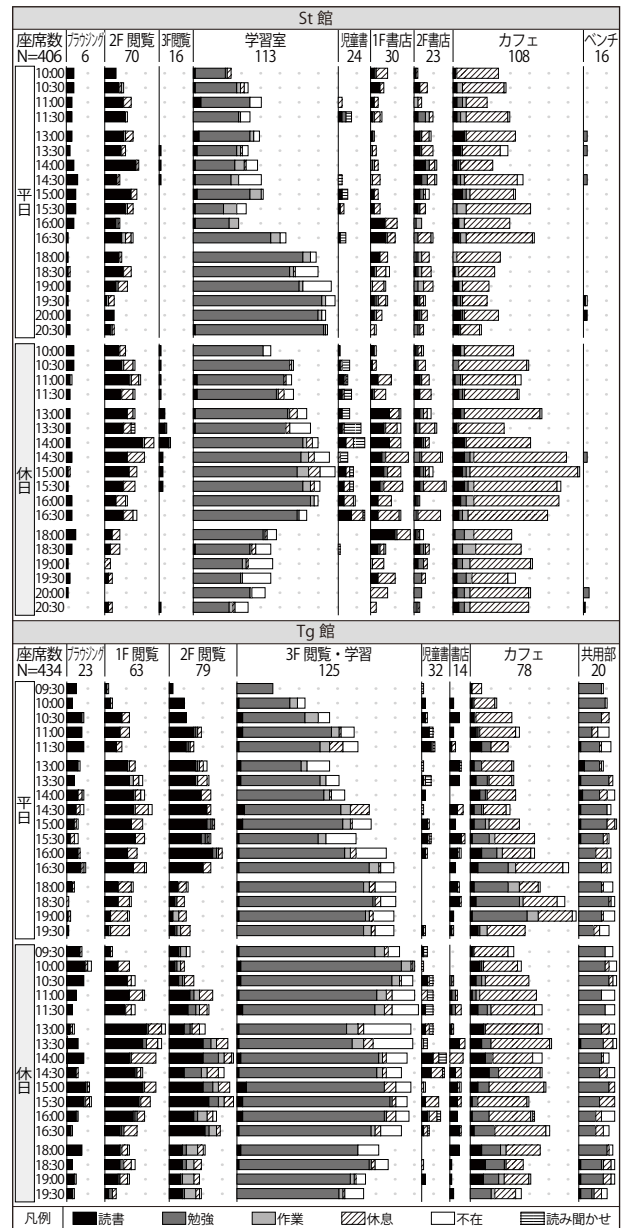


図4. 座席での利用行動の展開

次に利用空間のつながりに着目すると、両日ともに1・2階を中心に広がっており、特に1・2階書店、2階閲覧エリアのような隣接空間間で多くみられる。また各空間の利用者数をみると1階よりも2階の空間が多いが、これは2階が駅と直結しており、外出や帰宅のついでに2階入口から施設に立ち寄る利用者が多いためと考えられる。一方、3階の各空間を見ると閲覧エリアを除いて立ち寄り利用者はほとんどみられず、さらに3階閲覧エリアの利用者数は2階閲覧エリアと比較すると極めて少ない。これには、交流室や市民活動支援センターがガラスや間仕切壁によって閲覧エリアと

物理的に仕切られていることや、3階閲覧エリアが学習室として計画され、配架書架もビジネス書や専門書等の分類が多いことが影響していると考えられる。

Tg館の立ち寄り利用者の利用空間数をみると、両日とも約6割が複数空間を利用しており、特に休日は4つ以上の空間の利用もみられる。また、施設の入口近くに位置するカフェと書店は、両日ともに約2.5割もしくはそれ以上が単一空間利用者である。一方、各空間の利用者数に着目すると両日ともに書店の利用者数が最も多く、その約7割が複数空間を利用している。利用空間のつながりをみると、特に休日は非隣接空間のつながりが施設全体に広がっていることがわかる。これは、書店がエントランス近くに位置していること、Tg館全体がエントランス部分の吹抜けによる視覚的なつながりを有している影響と考えられる。加えて各空間の利用者数に着目すると、1階が最も多く上階ほど少ない。また2・3階の複数空間利用者は、2階が約8割、3階が約9割と高く、立ち寄り利用者の利用空間は1階を中心に広がっていることが読み取れる。

6. まとめ

本研究により、以下のことが明らかになった。まず複合施設の機能構成と運営方針から、1) 近年では利用者増加や用地取得難の対応として、気軽に利用しやすい飲食店や大きな空間を必要とするホール等の公共施設と複合する傾向にあること、2) 管理方式によって運営方針の傾向が異なり、指定管理者を導入した図書館では滞在指向型の運営方針を重視する図書館の割合が高いこと。次に St、Tg館の利用実態から、3) 設置される家具の種類は利用のされ方に影響を及ぼすが、注意書きによって学習室のあふれだし利用を抑えられる場合もあること。4) 駅と直結することで立ち寄り

利用者の割合は高くなること、5) 立ち寄り利用者の利用空間やその広がり、出入口の位置や壁などの物理的な仕切り、配架書架に影響をうけること、6) 低層部では直接行き来のできる空間間の利用が多く見られるが、吹抜けによる視覚的つながりにより上層部にも利用の広がりがみられ、特に休日は顕著であること。今後、施設利用者の約半数を占める立ち寄り利用者の利用行為を起点となる空間を含めて捉える必要がある。

謝辞
調査にあたり、各図書館の方々には多大なるご協力をいただきました。ここに記して深謝致します。
参考文献
1) 西川隆：『図書館建築発展史—戦後のめざましい発展をもたらしたものは何か』、丸善プラネット、2010年
2) 『図書館雑誌』、日本図書館協会 出版、2016年4月
3) 『図書館を含む複合施設の利用に関する研究』、村瀬久志 中井孝幸 田中隆一郎、日本建築学会大会学術講演梗概集 2016年

表5. 来館目的の定義

目的	定義	アンケート項目
解決目的	読む本や調べたいことが決まっており、それを解決するために図書館を活用する目的。	・読みたい本がある ・調べたいことがある
閲覧目的	特に読む本を決めずに、来館した後に本を探して読む、閲覧を目的とするもの。	・本を探すため ・読書をするため ・新聞・雑誌を読むため
環境目的	勉強をするための環境を目的とするもの。	・勉強をするため
休息目的	図書館の機能を直接の目的とせず、図書館で空いた時間を過ごすという目的。	・カフェを利用するため ・空き時間を過ごすため
限定目的	図書の返却のように強制力のあるものや、企画への参加など、一時的な図書館の機能に対する目的。	・返却するため ・企画に参加するため
その他	上記以外で観光やレンタル、書籍購入などの目的。	・その他

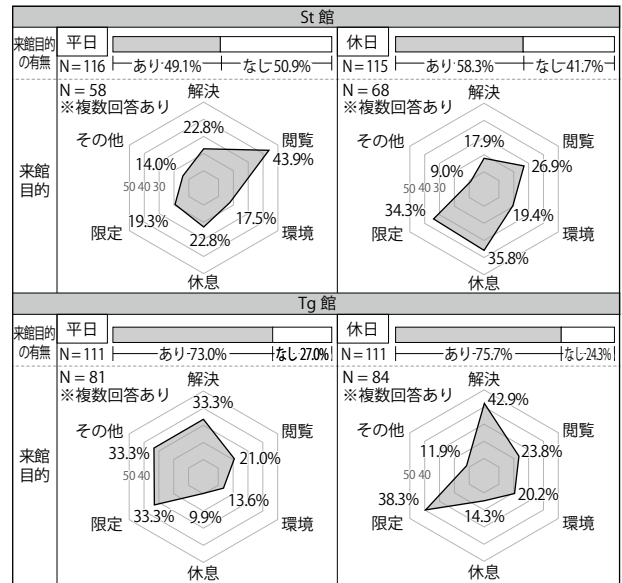


図5. 来館目的の有無と来館目的

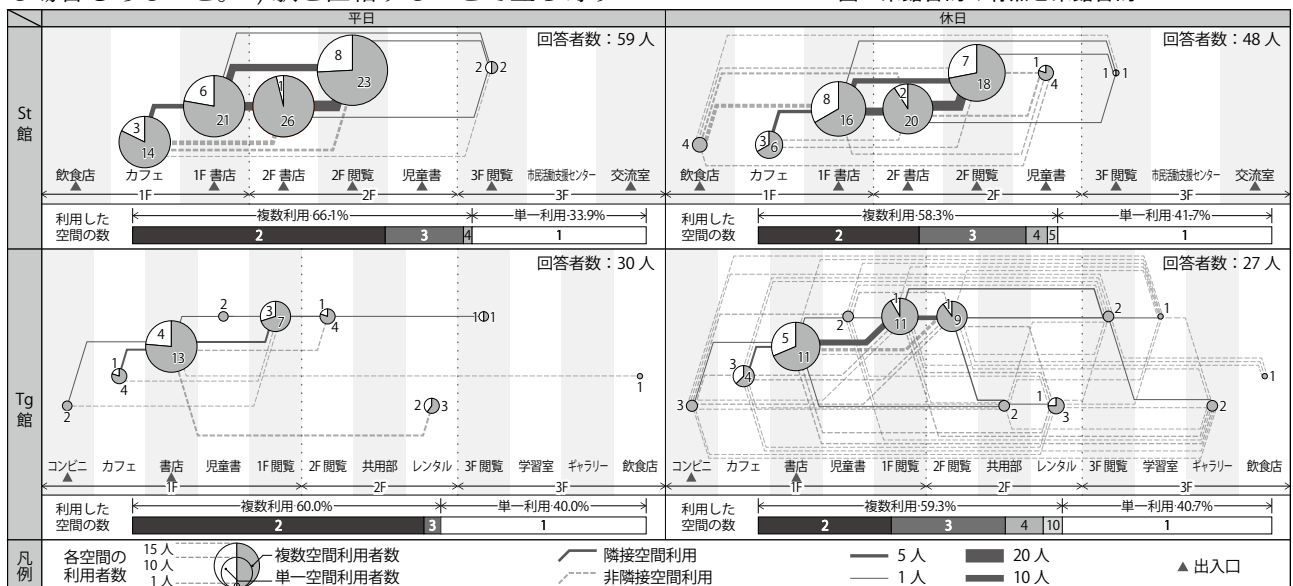


図6. 立ち寄り利用者の利用空間のつながり